

北伊予の伝承

IX



「年中行事絵図」中村文雄 著「正月注連」

松前所東公民館

年中行事 絵図

平成八年 中村 文雄

日本の良さは幼い頃から身につけて誰もが一生持つて歩ける年中行事の記憶から育まれてきた。

励ましと、各種団体の協力を得て、やっと五十枚の木版画を制作することができた。版画集の発刊の運びに至った事を感謝している。

平成十年八月

中村 文雄

どのページを見ても懐かしい行事が表現されています。本書では年中行事を特集いたしましたので、この版画を掲載させていただくようお願いしました。ご快諾をいただき各所に掲載させていただきました。おかげさまで充実したものが完成しました。

【表紙解説】

これは版画集『年中行事絵図』の表紙です。発刊したのは永田の中村文雄氏です。北伊予の伝統的な行事を精選して、すばらしい感性で仕上げています。

表紙の版画もその中のひとつです。表紙をめくると発刊に際して次のとおり書かれています。

「齢七十歳、版画の体験学習に誘われたが、関心はなかった。が女性の誘いなので教室に行った。ところが予想とは全く違う雰囲気なので、ついつい二年半が経ってしまった。

モチーフを年中行事に絞り、教師や同僚のモチーフを年中行事に絞ることで、向上心が湧

発刊にあたって

『北伊予の伝承 九集』をお届けします。

今回は「年中行事」を取り上げ、高度経済成長期（一九六〇年ごろ）までについて、聞き取り調査を中心に地域の方々の生の声を掲載いたしました。

現在は年中行事も年々簡素化しているのが実状ではないかと思われれます。

本誌が北伊予校区の皆さんのお役に立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、本誌の発刊にあたり献身的なご尽力を頂いた編集委員各位、資料をご提供いただいた方々や聞き取り調査にご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

とりわけ、永田の中村文雄先生には版画集『年中行事絵図』からの転載をご快諾くださいました。おかげさまで一段と充実しました。心より厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

松前町東公民館長 吉田 健勝

目次

一 正月の行事

1 正月の準備

- (1) 門松
- (2) 東古泉の餅つき
- (3) 徳丸の餅つき
- (4) しめ飾り
- (5) すす払い

2 大正月の行事

- (1) 初詣
- (2) 若水・屠蘇・雑煮
- (3) 若水・雑煮・屠蘇
- (4) おたなさん(歳徳神)

3 小正月の行事

- (1) 御祈祷
- (2) 組祈祷
- (3) 七草と小正月
- (4) 小正月
- (5) 旧正月
- (6) 旧正月の行事と餅つき

三好 安明
三好 安明
田中 孝
水口 憲三
日野 勇

水口 憲三
二宮 静喜
三好 安明
高石 勤

金子 忠行
水口 憲三
藤野 玉男
小松 ヒトミ
野本 和伯
済川 裕

6 5 4 2 1

10 9 8 7

17 16 15 14 13 12

二 春から夏の行事

- (1) 安井稻荷神社「初午祭」
- (2) 春祭り
- (3) なぐさみ・灌仏会
- (4) お薬師さんの虫念仏
- (5) 川ざらえ・井手そうじ
- (6) 輪越し(玉生神社)
- (7) 夏祭り(夏祈祷)
- (8) お大師さん
- (9) 山郷寺東・西組の庚申さん

大政 邦和
三好 健二
渡部 朝明
松田 雅子
田中 孝
日野 勇
加藤 招賞
水口 憲三
小松ヒトミ

27 25 24 23 22 21 20 19 18

三 盆の行事

- (1) 迎え火・餓飢棚(精霊棚)
- (2) 盂蘭盆・盆棚・精霊棚
- (3) 出作の盆踊り
- (4) 中川原の盆踊り
- (5) 大念仏
- (6) 百八燈

渡部 朝明
渡部喜代隆
小松ヒトミ
本田 眞一
鎌倉 啓典
三好 健二

34 32 31 30 29 28

四 秋から冬の行事

- (1) お月見
- (2) 秋祭り
- (3) 獅子舞と仁輪加
- (4) 亥の子
- (5) 安井「亥の子」今昔ものがたり

渡部喜代隆
本田 眞一
金子 忠行
野本 和伯
相原 隆志

39 38 37 36 35

一 正月の行事

初詣

除夜に氏神の社
前に集まつて犬
火(元旦火)を焚く。
その火を持ち帰
り神棚の燈明
に点じ雑煮を
煮る火とする。



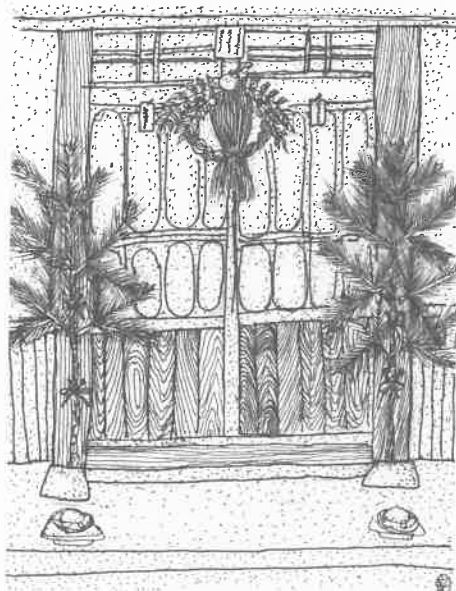
1 正月の準備

(1) 門松

東古泉 三好 安明 (昭和8)

早瀬辰郎さん(昭和3)、早瀬哲夫さん(昭和5)、松田清太郎さん(昭和6)に聞いた。

「東古泉は、門松飾りは各戸にはしなかったようです。12月25日ごろ伊予市の谷上山へヤマクサ(ウラジロ)をとりに行く。その帰り道、おん松(クロマツ)、めん松(アカマツ)の枝を1mくらい切って持ち帰ります。その枝を玄関の柱に左右にたてかける。柱のねもとにたてかけるのですが、釘で枝を柱に固定しているとところもありました。マツの割り木を2本たてかけ、その上の柱に松の枝を固定していたようですが、マツの割り木はつかわないところが多かったようです。玄関の上の中央に輪じめ



玄関の門松飾り

の注連なわにヤマクサとカブス(またはダイダイ)をつけます。この門松をそとかざりといいます。

そして正月一日、二日、三日の三ヶ日は雑煮の小皿を供える家もありました。東古泉だけでなく、門松飾りをしなかった理由は、平野部地域の松前町は松林の山を持つている山主が少なくて、伊予市の谷上山あたりの松を切ることは犯罪とみなされます。そのためマツの小枝を持ち帰るくらいで門松飾りをしていたのではないかと思います。」

これでお正月の門松飾り、注連縄飾り、餅つき、若水、雑煮、屠蘇の準備はととのい、正月を迎えます。



『年中行事絵図』中村文雄 著「門松」

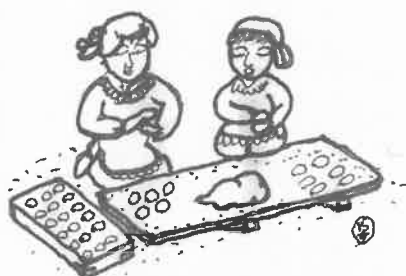
(2) 東古泉の餅つき

東古泉 三好 安明 (昭和8)

早瀬辰郎さん(昭和3)、早瀬哲夫さん(昭和5)、松田清太郎さん(昭和6)に聞いた。



図① 餅つき



図② 餅をまるめる

「餅つきは、モチ米を洗って木桶またはバケツに入れ水を加え1〜2日間漬けておきます。餅つきは12月29日と巳の日をのぞいて30日におこないます。土間にむしろを半折にして水でぬらしておき、そぐった2〜3本のモチわらをむしろの四方に置きまします。これがしめわらの代りになります。むしろの中央に石臼を置き(木臼をつかう場合もあります)あらじめせいろに入れて蒸したモチ米をすばやく臼の中に入れ、戸主が杵で東または西のほうをむいてつき、女の方が手水とりをします。一臼は1.5升(2.7ℓ)くらいです(図①)。つきあがった餅は小麦粉



図③ セイロにいれ、餅米を蒸す

つきます。寒の水で水餅にカビの生えるのを防ぎます(図②)。餅をまるめる(図③)。せいろに入れ餅米を蒸す。

神々に供える餅には次のような種類があります。

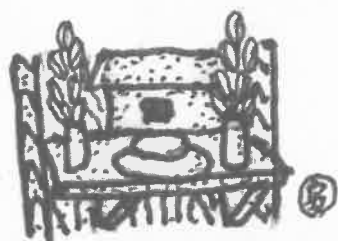
大小の鏡餅

三方の上に半紙を三角形に半分折り折ります。その上に山草(ウラジロ)をのせ大小の大きい鏡餅をのせ、小さい方の鏡餅の上に葉をつけたカブスまたはダイダイをおきます。これを床の間に置きます(図④)。つぎに屋敷の隅に鎮座されているヤブ神様(屋敷神)に一對



図④ 鏡餅(床の間におく)

をまいた板の上におき、手ばやく丸く団子状に手で切りとります。それをまるめて小餅をつくりまします。60kg(一俵)ついていた家もあります。小餅のほかに鏡餅・雑煮餅・神々に供える餅をつきます。水餅・あられ・かきもち等は旧正月前に



図⑥ 荒神様
(台所の荒神柱にまつている)



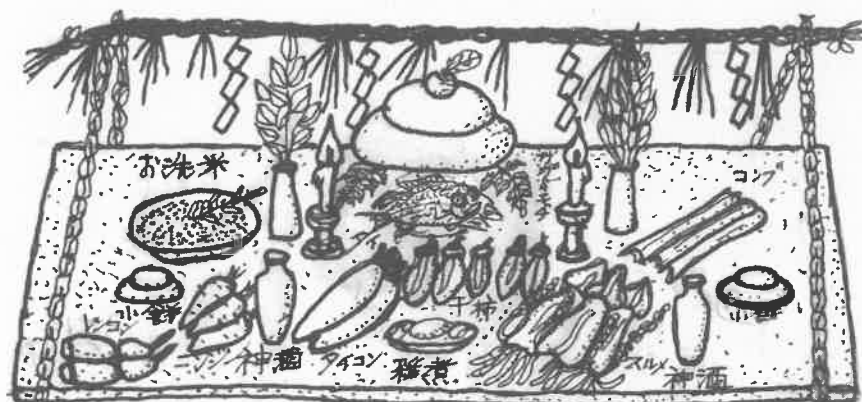
図⑦ 水神様
(井戸、水かめにまつている)

長さ1.8m厚板をなわでつるします。板は南北につるし、西から東へまた東から西へ向かって拝めるようにしておきます。四手を垂らした注連なわの結界を上部にはります。板の上には一対のサカキ、お灯明、お神酒、また中央にウラジロを敷いた大小の鏡餅を置き、上にカブス(ダイダイ)をのせます。両はしに小餅を、前の中央には雑煮の小皿をおきます。小鉢にお洗米、レンコン、ニンジン、ダイコン、干柿、スルメ、コンブそして鯛を一匹供えます。以上で準備は終了です。年棚は除夜の夜ふけに吊るすのがならわしになっています(図⑧)。



図⑤ ヤブ神様(屋敷神)

サカキと小餅を供えます(図⑤)。つぎに荒神様に一対のサカキと小餅を供えます。荒神様は台所の荒神柱に祀られていて火をよく使う所を鎮めてもらうためです(図⑥)。つぎに井戸または水カメの水神様に小餅を供えます(図⑦)。最後は年棚です。お棚さんともいいます。座敷の天井から



図⑧ 年棚(お棚さん)

(3) 徳丸の餅つき

徳丸 田中 孝 (昭和10)

お正月を迎えるにあたり、その準備の一つに餅つきがあり欠かせないものです。餅つきの準備として最初に11下旬から12月上旬に新ワラでムシロを4〜5枚編み準備する。次に餅つきの前日田んぼの畦道でヨモギを沢山摘みヨモギ餅用に準備した。またモチ米約4斗を洗い、4斗ダルに漬ける。裏庭にレンガと土で臨時の釜処作りをする。餅つき当日朝早くから家族全員で手配し餅つきの前にモチ臼の両端に塩盛りし、しめ縄を飾って恵方(その年の干支に基づいて決められた縁起のよい方角。正月元旦に恵方にあたる神社やお寺にお参りして一年間の福徳を祈る)に向かってお祓いをし祈ってから餅つきを始める。最初についた一臼は(約1.5ℓ) 鏡餅用と水神様・仏様等のお供用として形取りし、新しい餅箱にて乾燥の上、それぞれにお供をする。モチ米4斗の内、約2/3をまる餅にし、新しいムシロを床の間に敷並べ、その上にまるモチを並べて乾燥さす。残る1/3は餅箱に厚さ5cm程度にし乾燥させ、正月明けに厚さ5mm程度の長方形に切り、カキ餅にして火鉢の上で焼いてたべたり、また1cmの正方形に切りアラレ餅にしてホウロクで炒り、水アメで固め、間食用としてよくたべたものです。

当時の餅餠のことですが、小豆でなく、ササゲ豆(ササゲ豆は小豆より実が大きく作りやすく収穫も多く、色は小豆と変わらず、味は少し劣る)を使用。砂糖は、砂糖木を畑で作り絞って煮詰め乾燥し作る。餅餠作りにその砂糖をよく使ったものです。

出来た餅は床の間に敷いたムシロの上に並べ乾燥させますが、この餅の並べ作業は子どもの担当でよく並べたものです。これの並べ方が悪いと再度並べ替をさせられた事が思い出されます。

この餅がよくネズミに引かれる(ネズミが前足二本で餅をかかえ、後足二本で後向に引いて行くこと)ため、夜通し交代でネズミの番をしたものです。

元日の朝、おやじ(父)がこの餅で雑煮餅を炊き(元日の朝一番の食事は、男性が作るという風習があった。)家族全員で食事となりますが、この席でおやじの講釈を上(う)の空で聞きながら食事をしていたことを思い浮かべます。



餅つき

(4) しめ飾り

出 作 水口 憲三 (昭和12)

しめ飾りとは、正月や祭りのときに、神聖な場所や神を迎えるしるしとしてしめ縄を張って飾ること。またその縄で作った飾りもののことである。

子どものころから父親に教えられてしめ飾りを作るようになった。しめ飾りと一口にいつてもその形は千差万別でずいぶんと多い。

愛媛県の中予地方でもっとも多いのは写真①のような形のものである。丸い中は2本一組が3組、合計6本ある。これには深い意味がある。それは3夫婦（おじいちゃん・おばあちゃん、お父さん・お母さん、私たちのそれぞれ夫婦）がそろっている。すなわち、先祖代々繁栄することを願っている。中央の2本は



しめ飾り ①

しめ飾り ②



恵比寿様の神棚しめ飾り ③

お父さんとお母さんを表し、その家の中心をなすもので威厳を保っている。また、家内そろってみんな仲むつ、まじく暮らすことを祈って、円の中はむつ、つ（6本）ともいわれている。

このしめ飾りを玄関や勝手口などに飾っている。飾るときには、わらの穂先が、向かって左になるようにして、うらじろ（山草ともいうしだ類の1種）を2枚重ねてつける。また、玄関などには、かぶす（だいたい、ともいいう）を付けて、先祖代々繁栄するように願っている（写真②）。

戦後間もないころは、各部屋の窓、便所、牛小屋、鶏小屋、農具やくわ等にもしめ飾りを供えた。また後になって普及した耕耘機やトラクターにも供えるようになった。

恵比寿様や大黒様の神棚には写真③のような形のものも使われている。

座敷の神棚には写真④のようなしめ縄も飾っている。神社には大しめ縄も使われている。

以前は各家庭で、親から子に伝え教えられてきたが、最近はそのがなくなってきた。三世代交流活動のような形で取り組み継承に努めている。

また、北伊予小学校では5年生が高齢者と交流してもち米をつくり、餅つきをして楽しめ、さらにそのもち米のわらを使ってしめ飾りつくり挑戦している。



座敷の神棚のしめ縄 ④

(5) すす払い

横田 日野 勇 (昭和9)

横田に住む80歳前後の数人から「すす払い」の行事について、体験談を聞いた。

「正月前の大掃除に、青竹の先のささで家の内外のすすを取り除いた。すす払いは地域で決めて行う行事ではなく家の行事として行つた。」「各家には煙突があつて、台所や風呂場から出る煙を外に出していたが、多くの煙が、たき口から内に出て周辺に充満した。その煙がすすになつて軒や天井裏や台所周辺をすすだらけにした。」「台所は土間にあり、煙のよく出る燃料を使つていたが、高度経済成長の時期になると、ガスや石油が使われ、台所が改善された。煙突がなくなり、台所が部屋の一部となつた頃からすす払いをする家が少なくなつた。」と言う。

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まつた。私は国民小学校一年生、その日の記憶は鮮明である。その翌日、故事来歴にくりわしい近所の地主さんの家から、すす払いのための青竹が配られた。隣近所がそろつてすす払いをするよう促したものだつた。その時、祖母から「青竹ですす払いの道具を作ろう。」と呼びかけがあつた。「お前も小学校一年生だ。家のためになる人間にならないかん。お父さんに代つて、二人ですす払いをしよう。後であんこのだんごを作つてあげるからな。」祖母の命令に従つて、作業服に着がえ、タオルでマスクをして、目だけ出して、作業に取りかかつた。祖母の点検はきびしく、高い所やすみずみのすすを除けるのに疲れはてた。祖母は、台所周辺や神棚をていねいにふき掃除をしていた。終わつて、風呂場で体を洗つた。いくら水をかけても黒ずんだ水になつた。特に鼻の奥のすすには困

つた。弟に笑われた。

聞き取りと私の体験では、納得できない点があつたので、松前町図書館へ行つた。

「正月準備開始の第一段階をコトハジメという。12月13日がそれで、家の内外のすす掃きをなし、夜はささやかながら家族で祝宴をした。松山市の湯山地区では米の団子雑煮を作つて神さまに供え、家族でも食べて祝つた。魚島村(現上島町)では、13日をすす取り節供といつた(『愛媛県史』)。「近來は大掃除の意味で、12月25日から28日頃にする家が多いが、もとは年神祭りのため物忌にはいる日で、12月13日とするものが古風であつた。この日をすす取り節供といい、神棚やいろりの自在鉤などはとくに念入りに清め、魚や煮めしなどをすす神様などに供える地方もある。竹竿の先にワラをくくりつけるすす取りの道具を煤ぼんどんといひ、使つたあとは小正月のどんどで燃やすところが多い(『大日本百科事典』 小学館)。」

近所に新暖房が切りこまれ、大きなレンガ造りの煙突がある家が建てられていた。「これ何」と数人の小学生が、「サンタさんの煙突みたい。かつこいいなあ。うらやましい。」と叫んでいた。不思議そうに、かたわらに積まれていた薪をながめていた。俳句の季語にもなっている「すす払い」が生活の中から、消えようとしているのはさびしい気がする。



『年中行事絵図』 中村文雄 著「すす払い」

2 大正月の行事

(1) 初詣

出 作 水口 憲三（昭和12）

初詣^{はつしぎ}というのは新年になって初めて、神社やお寺にお参りすることである。昔から真夜中の0時になるとお参りを始めていた。今でも除夜の鐘が鳴り終わるといつせいに参拝者がなだれ込むようなニュースの報道をよく見る。

初詣について出作の二名神社の神主米家敬史さん（昭和25）に聞いた。



氏神様のお正月

「新年を迎えるに当たっては、宮総代の方々にお手伝いをしていただき、お宮の清掃をして、しめ縄を作り飾り付けます。

新年になると、太鼓を打ち祝詞『大弘い』を奏上して、罪穢れをはらい、今年一年間の平安を祈禱します。

神主の祈禱が始まると、待っていた参拝者はかしわ手を打って新年の願

い事をお祈りします。そして、神社の本殿で宮総代さんからお神酒をいただき飲んで帰ります。

昔から三社参りといって氏神様にお参りしたあと自分の好きな神社やお寺等2か所、合計3か所をお参りすることが多い。」ということである。

そう聞くと出作では二名神社のお参りの後、隣の吉祥寺^{きょうしやうじ}にお参りする人が多いようだ。吉祥寺でも住職さんが太鼓をたたきながら般若心経を唱える。参拝者も本堂に上がり、寺総代さんからお酒を注いでいただき飲んでから、住職さんに合わせて般若心経を唱えている。

夜中の参拝者よりは夜が明けてからのほうが参拝者は多いようである。

出作では氏神様とお寺が隣にある。江戸時代の神仏混淆^{ぶつこんごう}のなごりからか、北伊予には神社とお寺がすぐそばに並んでいるところが多い。



吉祥寺山門と二名神社(氏神様)

(2) 若水・屠蘇・雑煮

永田 二宮 静喜 (昭和5)

大正月の行事のしきたりである「若水・屠蘇・雑煮」について、永田の中村文雄さん(大正14)に聞いた。

大正月の若水については「元旦に汲む水を若水と言い、元日のまだ暗いうちに汲む若水は邪気を祓い、無病息災を願う行事である。それを汲みに行くことを若水迎えとも呼ぶ、若水迎えは男の役であり、一般に男親、長男の大切な仕事とされている。若水は泉や井戸の水をつるべで汲み、桶にためて神様への供え、また、家族が手や顔のほか、口をすすいだり、食べ物を煮たり、お茶をたてたりするため、清い水を汲みおくとともに年の初めに水の神様、井戸の神様を祭るものであった。水は神聖視され、穀物は豊作で、人々には多くの子どもが授かることを約束すると考えられてきた。そのため水神様として祭られたり、水に関係する井戸、川辺、泉は神託を受ける場とされてきた。また、正月などの特定の日には特定の泉や井戸から汲んできた水には生まれ変わりや若返りの霊力があるとされ、若水は心身を清め、生気を蓄えようとするものであり、毎年新たに生まれ変わることを意味している。」と言う。

つぎに屠蘇と雑煮について聞いた。

「正月にはとこの間に家族が揃い、一年間の家内安全と健康を願って、神前でおせち料理をいただきながらお屠蘇を酌み交わす。このお屠蘇は肉桂・桔梗・防風・山椒・大黃などの薬種を浸した酒で、元旦に飲むことで邪気を払い延命・長寿を祈るものである。」

お屠蘇は大晦日の晩、薬種を調合した袋を井戸に吊し、元日

に取り上げて酒に浸して造るものであるが、地域によっては元日に神棚に供えたお神酒にお屠蘇を入れて飲んだり、神棚にあった神酒をお屠蘇といつて飲む所もある。

正月といえば餅、元旦といえば雑煮を想像させられる。正月に雑煮を作り神棚に供えるのは男性の役割である。

雑煮は、神棚に供えた餅やその他の食べ物をおろし、それで雑煮をこしらえて食べる習わしであり、その日に初めて雑煮をいただくのである。雑煮とは、正月のお供物を皆一緒に煮た餅吸物のことである。

雑煮の餅は一般に小さな丸餅を用いるが、この餅に添えるものは豆腐・大根・人参・しいたけ等を皿に盛りつけ、三宝で神前に供える。神棚に供えた後、家族の食べる雑煮を作るのであるが、今度は家族の希望により、大きな丸餅、角餅、あんの入った餅で作られた雑煮を食べる。雑煮は正月の三日間、毎朝神棚に供え、家族も食べることになっている。」と言う。



若水汲み

(3) 若水・雑煮・屠蘇

東古泉 三好 安明 (昭和8)

早瀬辰郎さん(昭和3)、早瀬哲夫さん(昭和5)、松田清太郎さん(昭和6)に聞いた。

・若水

元旦の朝、戸主が暗いうちに井戸または水道水を手桶にくみ、家の台所の水がめに入れます。

若水をくむとき戸主は、「福くむ徳くむさいわいくむ、よろずの宝今ぞくみ取る。」と唱えるのですが、出作の地区では今でも唱えている家もあるようですが、東古泉では唱えている家はないうです。

若水は家族の洗顔や雑煮を炊くときにつかいます。

・雑煮

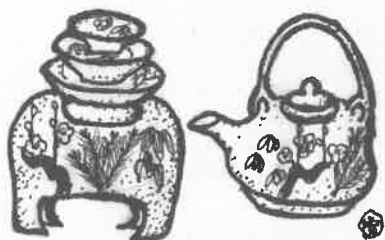
若水をつかって雑煮をつくりまします。家族みんなから食べる数の小餅を聞いて、その数を鍋に入れます。他にダイコン・ニンジン・ゴボウ・焼き豆腐・コンニャクを入れます。できあがった雑煮は年棚、床の間、家の神々等に供えます。正月の1日、2日、3日三ヶ日は毎朝雑煮をつくって供える家もあります。

・屠蘇

家族が居間に集まり、戸主が新年の挨拶のあと戸主から順番に屠蘇をのみ一年間の家内安全、健康を祈ります。そしてお節料理を食べながら雑煮を食べます。子ども、孫たちはお年玉をもらいます。



『年中行事絵図』中村文雄 著「餅花」



屠蘇用の三段杯

(4) おたなさん(歳徳神)

神 崎 高 石 勤 (昭和14)

「おたな」は歳徳神・歳徳さんともいい、正月の神様を祀る棚飾りである。長さ180cm、幅40cmくらいの「たち板」といわれる板を恵方(その年の干支により良いと定めた方角、明き方)に向けて天井からつるし、お重ねの鏡餅やお神酒、タイなどの肴や干し柿・こんぶなど、海・野・山の幸を供えたものをいう。地域によれば、たち板の代わりに「箕」をつるしたり、床の間の隅に「三角の板」を渡すものなどさまざまである。

「おたなさん」や「注連縄」・「門松」について、神崎の高石明男さん(昭和4)に聞いた。

「飾り付けた『おたな』をつり下げるため水平に360度回転する常設の木杵が天井に付いていて、年ごとの『明け方』に自由に向きを変えることができました(図1)。うちでは昭和30年代末ころまで祀っていました、その後は簡素化や家の新築もあり今のように『おとこ』に祀っています(写真1)。

「おたなさん」のお飾りは30日に行い、お祈りは大晦日の夕方に行います。上部には、青竹にカブス(ダイダイ)やヤマクサ(ウラジロ)を付け、葉を垂らした「よこじめ」のお飾りを付けました。たち板の中央の三宝には、カブスと干し柿を乗せヤマクサを敷いたお重ねの鏡餅、さらに三宝の四隅にお米を供えました。この神が歳を戴く歳徳神です。またヤマクサを挿した「おみきず」(お神酒徳利)と「おひかり」(燈明)を各々一對飾りました。歳徳神の右側には門松様、左側には田神様をお祀りし、それぞれお重ねを供えました。さらに、それぞれの神様には朝は雑煮(夜はご飯)、大根・人参・ごぼう・コンニャク・竹輪・豆腐

などの煮込み、小ダイ、田作りの四品を木杵のお膳に載せお供えしました(写真2)。これは正月の神様と田の神様とを一緒に「おたなさん」にお祀りし、一年の五穀豊穡も併せて祈願したのです(図2)。



図1 おたなさんとおとこ



写真1 現在の正月のおとこ
(高石明男氏宅)



写真2 おたなさんのお供え(高石明男氏宅)

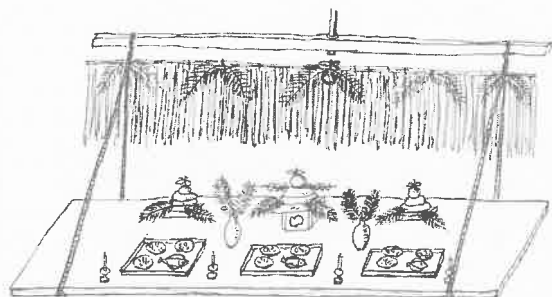


図2 おたなさんのお供えとお飾り

お供えした干し柿・田作り・みかんなどは、「おふね」と称する舟型のホゴの中に納めて保存したと聞きますが、私は記憶にありません。苗代に粃を播く5月の「オサイバイオロシ」の日に、これを水口に藁で作った舟に飾ったのです。正月の神様と田の神様とは、お供え物を連結させているのです。これらのお供えは4日に、『わじめ』や『よじめ』などのお飾りや門松は7日に下げ、15日の小正月にはや(燃や)しました。

うちかざり(屋内の飾り)で見逃せないのが『おとこ』です。『おたなさん』をつるした同じ床の間に『お年玉』というお重ねを三宝に乗せ供えました。『おとこ』のお供えは、正月に祝う神様の多様なことを物語っています。」と言う。

さらに注連縄と門松について聞いた。「注連縄は大きく分けて『わ(輪)じめ』と『よこじめ』に分かれます。『わじめ』は『お飾り』ともいい、さらに大・小の区別

があります。これは門、玄関、露地門や屋敷神に用い、『よこじめ』は藁を垂らしたものと、単なる横一文字の縄だけのものがあり『おたなさん』や神棚用にします。

門松は黒松をオン松、赤松をメン松と雄雌にみたて左右一對に造りますが、両方が揃わないので苦労しました。その松に竹・梅を加えて『さいわい木』という割り木の束に挿しました。これが門や玄関の屋外飾りです。正月の神様が飛来するという門松の割り木の上にも雑煮やご飯を供えました。屋外飾りに対して屋内の飾りが『おたなさん』です。戦中・戦後、物不足と新生活運動のため門松の松の伐採が禁止され、当分の間『紙に印刷した門松』が玄関口を飾ったことがあります。」と言う。

さらに、「ヤマクサ取り・お飾り作り・門松・おたなさんの飾り付けなどの正月の準備から正月行事一切の『おつとめ』は男性の仕事で、正月の間、女性が雑煮を作ったり、神様にお供えをすることはしませんでした。」と言う。

ここで、「おたな」の祀り方について県内二地域の例を記しておきます。

まず中予の山間部、久万高原町(旧柳谷村)の矢野森さん宅では、「歳を載く歳床さんは、部屋の間へ三角の板を渡し、歳床鉢(桶のような入れ物)にウラジロを敷き、その上に白米一升(1.8ℓ)を入れ、米の上にお重ね餅を供えます。」

また東予の平野部、西条市楨瑞の三木秋夫さん宅では、「歳徳神は、かつては『たち板』を恵方に向けて天井からつるし、お供えを並べました。昭和30年代に家を新築してからは、恵方に向けたテーブルにお供えしています。さらに金運を願って財布も供えます。」とさまざまである。

3 小正月の行事

(1) 御祈禱

横田 金子 忠行 (昭和7)

小正月前後になると地区毎に、御祈禱が始まります。横田の御祈禱は、沖代組と本村組の二箇所で行っていた。1月の15日と14日の午前中が沖代組、14日の午後から15日が本村組と決まっていた。子どもの中には小学校から帰ると、御祈禱の宿に行つて炊き込み御飯を御馳走になっていた。座敷では天長寺の和尚さんが、山の如くに積んであるお経の本を、一冊ずつばらばらと開いては読経しながら積み替えていた。こんな仕事は和尚様は大変な事だなあと、子ども心に思っていた。

天長寺が住職不在となつてからは、晴光院様の兼務となり、御祈禱も一日で終るようになった。御祈禱の準備もいろいろあるが、経本を入れる唐櫃や、祭壇にしめ縄を付けたたり、御札を作つたりする。御札は半紙を適当な大きさに切つて、版木に墨を付けて刷り上げる。版木も相当古くなつていて、判読困難な所が多い。

諸天善神 七難即滅	御札
大般若波羅密多經般若會上佛菩薩十六善神攸	
春來 □ □ 七福即生	

日天供之札	敬白	外包札
		

御札の外包札に天長寺の御朱印を押して出来上がる。祭壇の正面に十六善神の軸を掛け、大般若理趣分經、大般若經

十卷、作つたお札、塩水、御酒、米、餅一重、炊きたての御飯等を供える。

一方では、米や大根、人参等の野菜や割水等を、各家を廻つて集める人や、郡中(現在の伊予市)の商店で魚や竹輪、蒟蒻等を買つて戻る人たちなど、手分けをして働いた。材料が揃うと、それから男料理が始まる。普段は包丁を持った事のない人もいたが、器用な人も数人いて、御祈禱当番宿の女性二人と一緒になつて、料理を作る。内容は御飯、牛肉、玉葱、牛蒡等を入れたお汁、刺身(ヤズ)、皮鯨と大根、人参等を混ぜたあえもの等が主な料理であつた。

御祈禱は和尚様が定刻にお見えになると、参加者一同が、祭壇の前に正座する。先ず和尚様が燈明を灯して、塩水を南天の葉につけて祓い清めて、読経礼拝する。大般若經を手に取つて、舞扇の開くが如く、閉じるが如くに、操る手際はお見事だ。十卷の大般若經の礼拝が終ると、参列者一同の家内安全、無病息災を願つて、一人一人の肩に大般若理趣經をただかして下さる。

御祈禱が終わると、経本の入った唐櫃をかついで、組内の各家を廻る。家に着くと唐櫃を差し上げる。家の人はその下をくぐつて礼拝する。昔は経本を一杯入れて重かつた。最近では経本を少なくして、軽くして鉦を叩きながら廻る。御祈禱の終わつたお札は各家に持ち帰る。別に青竹慰勞会で皆んなでにぎやかに酒を飲む。新しい年に、組内の人が皆元氣であるように念じつ。

近年日曜日に御祈禱を変更した。料理も簡単なものを料理屋で取るようになった。日時や方法は変わつても、御祈禱の行事は、ずっと伝承されて行くと思う。

(2) 組祈祷

出 作 水口 憲三 (昭和12)

ここでは、組祈祷またはお日待ちといわれる行事について出作の水口正三さん(昭和7)に聞いた。

「出作では組祈祷と呼び、新年早々に組内の者が当番の家に集まり、新年の挨拶を交わしたり、組のことを相談したりした後、懇親を深め合う行事のことである。

戦争中は、武運長久・家内安全・無病息災等を祈っていた。組により神様を祀ったりお地藏さんを祀ったりしている。したがって、宮司さんや住職さんに来ていただき、みんなでお祈りをしてきた。

最近では神事の後、組長を決めたり、組代表の評議員を決めたりしている。また、その他の組のことであるいろいろ相談したりしている。

山郷寺組の例を挙げると、昭和52年ころ世帯数が増加し、個人の家では全員が入りきれなくなったため、東西の二つの組に分かれた。しかし、今までひとつの組で仲良くしてきたのに1年に1回や2回は一緒に集まって親交を深めたいとの願いから、新年早々の組祈祷と夏の庚申さんの2回だけは、今までどおり東西の組と一緒に集会所で行事をしている。「山郷寺東・西組の庚申さん」参照)

この組祈祷の懇親会の料理については当番の人の負担を軽くするため仕出し料理を利用するようになった。

戦争までは、正月行事の名残からか、男性だけの手で料理をしていた。かなり質素なものであったらしい。昭和40年頃の山郷寺組のご祈祷の懇親会料理はかなり豪華なものであった。内

容はぶりの刺身・鯨の皮のからし味噌和え・湯豆腐・すき焼き等であった。これらのお世話はお世話は当番を決めて順番にしていた。大勢の手が必要のため、当番に当たっている者だけでなく、昨年した者と来年の当番に当たっている者も見習いではないがお手伝いに行っていた。今では仕出し料理を利用するために今年の当番と来年の当番と2人(実際には東西二組なので4人)でしている。」と言う。



組祈祷の神事



(3) 七草と小正月

永田 藤野 玉男 (昭和18)

小正月のしきたりについて、永田の中村文雄(大正14)さんに聞いた。

「正月の六日の夕べから七日にかけては、一年の中でも最も大切な夜であった。六日の年越しとか、六日年とりとも言われている。そのため昔からムカイドシとしてつかっていた。

また、正月の七日に七種の野菜を粥に^か入れて雑煮を^た炊く。

七草はセリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロである。七草粥は前夜に炊くところもあるが普通は七日に炊いている。七草粥は家族が揃って食べ、その年の運勢や家族の健康を願って食べるものである」と言う。

次に大正月のお飾り(しめなわ)をはやす(焼く)ことについて聞いた。

「お飾りは正月に各家庭で神棚をはじめ、それぞれの神が宿るとされている家の出入口、井戸、かまど、便所、農機具等に正月三が日飾られる。このお飾りとともに三宝に餅や米、みかん、昆布等とともに雑煮も供えられる。それぞれの神様に供えられたお飾りは4日にははずされる。このお飾りを地域の家々から持ち寄って焼くのがお飾りはやしと言われるものである。

お飾りをはやす行事は正月の15日早朝に行われる。このお飾りをはやすときの火で餅を焼く、この焼いた餅を食べると一年間家族が安全で健康でいられるということ家で持ち帰り家族が焼いた餅を分けあって食べる。」

さらに、藪入りについて聞いた。

「藪入りは正月及び8月の16日に使用人が休暇をもらって生

家に帰ることであるが、その語源は都会から草深い田舎に帰るとか、一人ぼっちで行きどころのない使用人や郷里の遠い者などが藪林(寺)に入って遊んだことがはじまりといわれているが確かなものではない。

しかし、藪入りの習慣は都会の商屋の間に発生した形ばかりではない。全国的に藪入りには結婚してきた嫁が夫と一緒に嫁の実家に里帰りすることである。実家では嫁いだ家庭の状況や結婚生活等について報告するとともに肉体的・精神的な休養をしたり、実家の手伝いをしていた。

たぶん藪入りの日は、もとは先祖まつりの大切な日で嫁いだ娘も、遠くの他の地域に出た人も必ず親元へ帰るべき日であった。田舎では外出をいましめ、家族が家にこもって忌み謹んでいるところから、仕事をしない休みの日になったようである。」



『年中行事絵図』 中村文雄 著 「七草」

(4) 小正月

出作 小松 ヒトミ (昭和22)

1月15日を小正月と呼んでいる。つい先年までは成人の日とされていた。これは昔、小正月に元服したことに由来するようだ。

故事の「左義長」の火祭りから始まったといわれる「どんど焼き」「とうど焼き」等といわれる正月の送り行事を、15日の早朝に行ってきた。

出作では大がかりなとうど焼きは行われていなかったようだ。近隣の数人がお正月に飾られていた門松・しめ飾り・書初め等を持ち寄り一緒にはやし(焼くこと)ていた。今では自分の家だけでこの行事を行っているようだ。



点火前のしめ飾り

このしめ飾り等をはやすときは、庭先のきれいなところを父が掃き清めて、そこで火をつけていた。

この火でおもちを焼き、みんなで分けて食べていた。このおもちを食べると無病息災がかなえられるといっていた。またこの灰を踏んだりすると罰があたりといわれていて、その灰の処分もきちんとしていた。

子どものころから、お正

月の行事といえはほとんど全部を男性が行っていた。しめ飾りから始まって神棚の飾付け、若水汲みからお雑煮を料理するなどと、父を中心に男性だけで行っていた。

こうして、お正月から小正月までの間に使ったいろいろなものを片付けてやっとお正月の行事が終わったという感じがしていた。

このようにして、15日間の正月が終わると16日はお墓参りの日となり、この日から俗世間の行事が始まるといわれていた。



しめ飾りの上で餅を焼く

(5) 旧正月

神崎 野本 和伯 (昭和11)

現在の正月は、昭和の前半頃まで新正月と言っていた。それに対して、昔ながらの正月いわゆる旧正月がある。旧正月について、神崎の水口義一さん(大正9)に聞いた。

「新正月は1月1日で、新年になると年を一つとることになっていた。12月に生まれた赤ちゃんは2つになるのである。小学校1年生には、8歳(現在の満6歳)で入学する。仕事休みは1日だけで、2日からは普段の仕事日となっていた。しめ飾りなどは、門か玄関の二ヶ所のみで、本格的に正月の行事をして、仕事を休みにするのは旧正月であった。現在の立春頃になる。

旧正月の三ヶ日は、どこに目を向けてもお正月らしい風景があった。どの家庭も自家で作った門松を門の両側に飾っていた。また、近くの山(現在の伊予市南伊予地区)へ山草(ウラジロともいつてシダの仲間)を採りに行き、しめ飾りに取り付け、門や玄関などへ飾り、正月の神様を迎えるようにしていた。屋内では、神棚を作り、鏡飾、神酒、干柿、田づくり、葉つきみかん等々を供えた。他に、納屋、別棟、各神様(水神さん、おこう神さん)鋤、鍬など農具にもお飾りをつけていた。近くの川べりには柳が多く植えられていて、その柳の枝を切って、家々では、枝に手まりなどをつるして飾っていた。

旧正月の餅は沢山ついた。神様用と雑煮用のスヤ餅(あんこなしの餅)、また、かき餅(はがため)用や、あられ用の餅などなど。

かき餅やあられは、木わくに入れ固まった餅を夜なべをしな

から包丁でいいねいに切って作っていた。お菓子などめったには食べることができない時代の子どもたちにとって、貴重なものであった。

2日は、鍬初め、書き初め、初荷などの行事があり、現在に比べ熱が入っていた。

鍬初めは寒い正月風景にひととき目立っていた。半紙で作った四手(垂)を細い割り竹にはさみ、畑や田に立て、その元へ山草を置き、お神酒を注ぎ、今年一年の豊作を祈願した。」と言う。



『年中行事絵図』中村文雄 著「鍬初め」

(6) 旧正月の行事と餅つき

鶴 吉 濟 川 裕 (大正12)

旧正月のこと、いろいろな古い思い出の中から探しました。
昭和5年から10年、6年間の父の日記をみますと、旧正月は次の通りでした。

新暦年	旧正月日
昭和5	1月3日
昭和6	2月17日
昭和7	1月6日
昭和8	1月26日
昭和9	2月14日
昭和10	2月4日

戦前で、不況でしたが、比較的平穏な時代、もう70年以上も昔のこと、旧正月の行事的なことは見当たりませんでした。新暦の正月が慣行になっていたようですが、私の記憶に、組中の一軒だけ、旧正月の家がありました。高齢の老人の家でした。永年、慣れ親しんだ旧のお正月に特別の愛情を感じていたのではないのでしょうか。

私は思いました。そのころの農業は動力・機械以前の人力・手作業でした。稲は11月刈の晩生。鎌で刈って、足踏脱穀機でこぎ、弱い陽の光で筵干し、時間がかかりました。籾摺り、俵入れ、やっと稲の取り入れが終わり、牛耕、麦播きなど、一連の農作業が終わるのが年の暮れ。これでは、落ちついて、ゆつくりお正月を迎える気持ちと「ムード」になれなかったでしょう。冬至が遠のき、日に陽光の輝きが増し、春の光が強くなる約1ヶ月遅れの旧正月が私ども農業者にとって魅力があったように思います。

1月20日頃が大寒の入り、寒中に寒餅をつきました。赤や黄のあられ用に、焙(あ)つて焼くはがため(かき餅)用に、程よい固さの時、包丁で切つて筵に並べたり、天井から釣り垂らして乾燥して作りしました。これが重宝な自家製の田舎のお菓子でした。

寒中の水は雑菌が少ないので、保存がよいと言うので、水に漬ける水餅を作つて、黄粉や砂糖をまぶして、あべかわにして食べました。

そのころの子どもの遊びは、男の子がパッチン、爪揚げ、独楽回し、独楽の喧嘩、石蹴り、金輪回し。女の子が、お手玉、まりつき、羽根つき、カルタ取りなどでしたか？

学校で寒いときは、大勢よつてたかてするおしくらまんじゆ、ジャンケン馬乗りなどして温まったことなど思い出します。

最終にもう一つ、旧暦1月8日の椿さん、寒い中でも遠路もいとわず、お参り致しました。お土産に「おたやん飴」を買つて。



「年中行事絵図」中村文雄 著「餅搗」

二 春から夏の行事



印月八日・灌仏会
四月八日を釈迦の誕生
日とし、寺や墓参りを
して生誕仏に甘茶の
灌頂をしたり、甘茶を
飲むならわしがある。
甘茶にはふしぎな力
がひそんでいる。(ヤケド
の妙薬、豆類の発芽促進)

(1) 安井稲荷神社「初午祭」

鶴 吉 大政 邦和 (昭和16)

初午祭は、2月最初の午の日(夜)に行われる安井の稲荷神社の祭礼で、火を焚き、黄な粉むすびやお菓子などを食べながら談笑する子ども中心の行事の一つです。別名、地域では、火祭り、おつやとも呼ばれます。宮司さんによると火を焚く安井初午祭はとても珍しいそうです。

このおこりは不詳ですが、毎年、農事のはじめにあたり山へ帰っている「田の神」を「お火焚き神事」迎え火」でお迎えして、お祀りし、豊作を祈願する農耕を中心とした儀礼ではないかと考えられます。

現在の初午祭は、戦中・戦後中断されていたものを、昭和50年代に子ども伝承行事として、松前町東公民館鶴吉分館活動の一環で復活したもので、稲荷神社世話人・愛護部・婦人部・消防団の協力で行われています。



初午祭の神事

昔の様子を鶴吉の久津那安男(大正15)さんに聞いた。「この日は、子ども大将の采配で昼ごろから小学生の高学年がリヤカーをひき、各戸から割木(本来は門松の元の割木)二本と白米一合を集めて廻りました。その割木は稲荷神社境内に火祭り用に積み上げておきます。割木が少ない



神事が終わって、おむすびの配布



わいわい がやがや

時には、伊予神社や草田池で薪を集めて子どもだけで結構楽しみました。また、白米は宿に運んでおばさんたちに大釜でにぎりめし用に炊いてもらいました。これで作った黄な粉むすびは、ソフトボールほどの大きさで、「一斗じたみ」二杯分位はありました。

その黄な粉むすびは御神酒とともに神前にお供えし、お祭りの準備ができるころには人々が集まり始め、五穀豊穡と無病息災、家内安全の祈願をしていました。

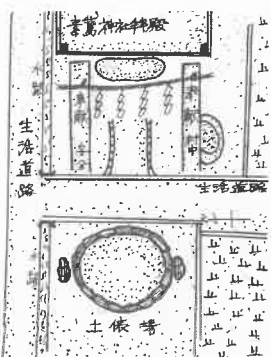
周囲がうす暗くなつてくると、積み上げた割木に点火し、みんなは真っ赤に燃え盛る火柱を囲んで、振舞われる黄な粉むすびと沢庵などを食べていました。しばし寒さを忘れて、大人は御神酒をいただき、四方山話を聞いたり、火をじーっと見つめて何かを考えたり、火の力やぬくもりに感謝したりしながら楽しいひと時を過ごしたものです。今でも懐かしい思い出の一つとなっています。」

(2) 春祭り

東古泉 三好 安明 (昭和8)

早瀬辰郎さん(昭和3)、早瀬哲夫さん(昭和5)、松田清太郎さん(昭和6)に聞いた。

「春祭りは中川原と東古泉は5月1日に行っていました、北伊予地区で統一されて4月29日になりました。子どもたちのメインは素鷲神社への奉納相撲です。春のチビッコ相撲です。



図① 素鷲神社前の土俵場



図② 奉納相撲の取り組み

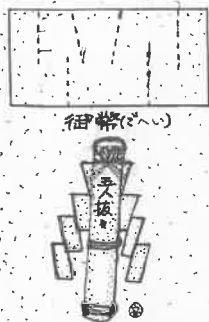
小中学生の自主的な活動です。大人の愛護班の役の方もありますが、ほとんど子どもたち任せています。祭りも近付くと中学生は地区の各戸をまわって寄付金を集めます。そのお金でノート、鉛筆などの学用品をそろえます。御幣づくりも、おいそがしです。そして土俵場づくりです。今はコミュニティ広場の南西のすみに一年ごとにつくります。昭和40年代前半ごろまでは素鷲神社の西側の道をはさんだところに土俵場があり、そこを利用して年団の人たちが年中使っていました。

いました。

まず土俵場づくりです図①。高1・2と小学生高学年がリヤカーで松前の浜まで砂とりに行き運搬するところからはじまりました。稲わらを持ちよつて荒なわでしめて行きます。出来上がると図②のようになります。土俵は前日までに完成しています。

いよいよ当日となりますが、現在の奉納相撲のようすはといいますと、前記しましたように、小・中学生の自主的な活動であるとの通り、取り組みについてはといいますと、3人抜きと5人抜きがあります。そして、幼稚園、小3まで、小4から小6、そして中学生と分けています。

それから、もしものために愛護班の役の大人が付き添っています図②。いよいよ奉納相撲がはじまりました。真剣そのものです。行事も高学年の子どもがします。5人抜き、3人抜きには図③の御幣が勝者にわたされます。御幣は約60cmのモウソウダケの筒に2枚の障子紙を重ねて図の破線のように切れ目を入れ、竹筒のうえ半分を割って紙をさし入れ、上部を水引きで結びます。この御幣は子どもたちの憧れの的(こころざし)です。相撲に負けると悔しくて泣き出す子どももいます。御幣のほかに、ノート、鉛筆、消しゴム、下じきなどの学用品もあり、これらは参加者全員に配られました。奉納相撲は3時間くらい続き、見物の皆さんから拍手喝采を受け終了します。そして全員が杜殿の前に整列し、奉納相撲が無事終了したことを報告します。」



図③ 子どもたちの憧れの的 御幣

(3) なぐさみ・灌仏会

永田 渡部 朝明 (昭和13)

春の行事やしきたりである「なぐさみ・灌仏会」について永田の中村文雄さん(大正14)に聞いた。

「4月3日は桃の節句といわれ雛まつりをする。雛まつりは女の子のまつりである。女の子が生まれた家では子どもが健やかで幸せに育つことを祈って雛人形を飾ってお祝いをする。数だんの雛だんには雛人形が飾られ、お供えものとして、紅白の菱餅や白酒、米やあられを飴で固めた菓子、果物が供えられる。」

4月4日はお節句である。この日はなぐさみといつてどの家庭でもおごちそうをつくる。このおごちそうを重箱につめて持ち寄り、レンゲ畑の中で食べたり遊んだりして一日を楽しんだ。

また、子どもたちは弁当を食べたり、遊んだりするために木材や竹で小屋を作り、夜は友達と泊まりこみ遅くまで会話したり、トランプ遊びを楽しんだ。」と言う。

次に灌仏会について聞いた。

「灌仏会は4月8日のお釈迦様の誕生日にお祝いのため、お寺にお参りし、レンゲの花で釈迦堂の屋根を飾り、安置された釈迦像を参拝する習わしである。」

お釈迦様は生まれてすぐチョコチョコと七歩ばかり歩いて、右手で天を、左手で地を指して「天上天下唯我独尊」と人間の尊厳を宣言したと言うことです。灌仏会の釈迦誕生仏はその姿を象り、その時、天から龍が舞い降りて、香りの高い油を注ぎかけて産湯に使わせたということで、灌仏会には誕生仏に甘茶を注ぎかける習わしになった。

参拝者は釈迦堂に安置された誕生仏に自分の願いをこめて仏様の頭上から甘茶を注ぎ、甘茶の接待を受けるとともに、持参した容器で甘茶をいただいて帰る。この甘茶には次のような効用があると伝えられている。

○甘茶で墨をすり、ある文言を書いて便所に貼っておくと虫がよりつかない。

○甘茶で墨をすり、茶とかいて室内の四隅に貼っておくとムカデが入らない。

○甘茶を家の周りにまけば蛇が入らない。

○甘茶を田圃の周囲にまけば虫がつかない。

○甘茶は火傷(やけど)の妙薬である。

このようなことが語り継がれており、地域では花御堂・釈迦誕生仏・灌仏盤・柄杓等を準備するとともに、甘茶の接待と配布を行っている。」と言う。



野遊び(ナグサミ)
雛節句の翌日に仕事を休み
み雛壇に供えた御馳走を
もって見晴らしのよい野山に
出掛け終日遊び暮らす娯
楽的な行事ではなくもって
深い信仰に根ざすものであ
った。行事の背後には野の
神迎えと関係があり農耕
にとりかゝる季節である。

『年中行事絵図』中村文雄 著「なぐさみ」

(4) お薬師さんの虫念仏

鶴 吉 松田 雅子 (昭和27)

毎年8月24日のうら盆の日、地区内の男子小学生たちが、午後6時ごろから鶴吉本村地区にある薬師堂で虫祈禱を行う。直径20cm位の鉦を子どもたちの掛け声で順番にたたき、「ナンマイダーブツ、ナンマイダー、稲の虫が目むいたー」と何回もくり返し念仏を唱える。昔は地区の青田の畦道を鉦をたたきながら歩いたそう。

暗くなつてくると、大人たちが線香を持ってお参りにやつてくる。各家をまわって集めたお金で用意したおせんべいを子供たちが配ってくれる。あかりとりの提燈も昔と違つてろうそくではなく電灯に変わつてきている。

この薬師堂も老朽化し、各戸の寄付で建て直した。平成10年11月3日の落成式では、もちまきをして地区の人たちでにぎやかに祝った。子どもたちも長い休みに入る前には全員でお堂の掃除をして守つてくれている。

百年くらい前までは、大人たちの行事であつたと聞いているが、今は小学6年生が大将となり、現在に至っている。

子どもたちも少なくなり、今年は7人の小学生で行つていた。愛護部のお母さんたちも見守つてくれている。



薬師堂の虫念仏(平成19年8月)

(5) 川ざらえ・井手そうじ

徳丸 田中 孝 (昭和10)

水資源地として、松山市森松町に北の泉と南の泉（この二つの泉を合せて夫婦泉と言う）があり、さらに砥部町に赤坂泉がある。北の泉は享保9（1724）年、南の泉は宝暦7（1757）年にそれぞれ完成し、以後毎年川ざらえを行うが、上井手重信川井門分水路のさらえ方について、毎年稲作植付時になると紛争するので、明治12（1879）年、一応基準を作ることとし双方より代表を選び、土台掘込の協定を同年8月作成して調印した。

明治14年井門分水路の土台掘付工事に当たり再び井門側より苦情が出て紛糾し、また双方より代表者を出して12年協定の附加協定を決め解決した。

○協定の要旨（川ざらえのための協定書）

一掘込みの時期は田植え時期4・5日とす。
一掘込みは村総出のこと。

大人組20組、小人組5組外井手筋石拾茶焚小人10組、組頭、農民

一河水切れの時、井手口より下一番桶まで2日間で掘り水路こう配井手底は三尺とすること。

一用水期間中、降雨のため砂流失したときは、その都度施工することができる。

一使用道具の制限

モッコの太さ及びクワ、また泉床ざらいにも水車の時期据え方、草刈カマの使用まで厳重な制限を受ける。

以上のような制限下で掘没を実施中は常に森松・井門村の

監視が嚴重であつた。

（井門村から徳丸村の給水口まで、重信川の底を掘り切り込み、ムシロを全面敷き水路を確保した。そして常時川ざらえをしていたが、分水路紛争は、明治16年及び明治24年及び大正まで続き、水利権妨害訴訟を提起し、その結果、徳丸が勝訴となり水利権は回復し現在に至る。）

このような協定の締結はしたものその後も紛争は続き、そこで徳丸区長は暗渠敷設を明治41年に計画し、森松村と交渉の結果、大正14年着工し昭和3年完成し長期にわたる紛争は解決し、以後重信川の川ざらえはしなくてすむようになった。但し夫婦泉から井門町の取水口まで（約800m）の間は現在も徳丸が40人程度で毎年2回実施し現在に至っている。

赤坂泉水系では、この泉完成（天明元年1781年）以来今日に至るも泉と川ざらえは毎年八倉・宮下・徳丸・出作の共同で年2回総出で実施している。

そのほか、徳丸として全水路を総出で（約400人）川ざらえと、井手そうじ

を毎年5月に実施するが、水草・土砂・ヘドロ等を含め、軽トラックに百台分くらいの搬出している。



夫婦泉下流の川ざらえ（平成15年）

(6) 輪越し(玉生神社)

横田 日野 勇 (昭和9)

玉生神社は、新立・本村・筒井・西古泉・北川原・恵久美・東古泉・永田・大溝・横田の住民が氏神さんとして信仰し、2万人にちかい氏子がいる。

玉生神社の高市宮司さんと横田の山崎健三さん(大正13)から聞いた。

「輪越しの『人型のお札』のおかげで、横田の人は、大谷川にいる蜷の災いから免れている。」とのいい伝えをよく聞かされた。8月1日の輪越しには、どの家の子どもたちも、名前を書き込んだお札をもって、3kmの道をいそいだ。大きな茅の輪をくぐり、これで災いから逃れると安堵した。茅の輪は、かやくさで作られた大きな輪で、罪けがれを祓う夏越しの大祓いに使用され、それをくぐるにより、疫病や罪けがれが祓われるといわれている。玉生神社では、茅の輪が置かれている場所の関係



輪越しの入口付近(玉生神社)



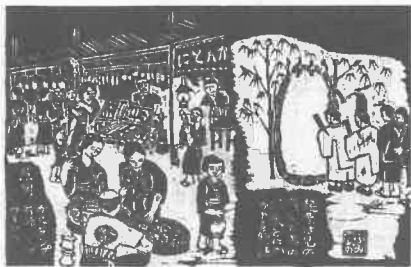
出店のにぎわい(玉生神社)

から、茅の輪を右回り3回して参拝し、お札を納める。

玉生神社からの資料によれば、茅の輪の起源については、善行をした蘇民将来が武塔神から、「もしも疫病が流行したら、茅の輪を腰につけると免れる。」と言われ、そのとおりしたところ、疫病から免れることができたという故事に基づいている(玉生神社からの資料)。

「輪越し」の賑いは、氏子地区の輪番で、奉納演芸をしている。以前は、伊予万才が演じられ、芸たつしやな子どもから大人まで大勢の人で賑った。現在は、カラオケが中心になり、日頃練習をつんだ民謡も加わり、人気がある。出演者は氏子の方で顔みしりが多い。舞台づくりや演出は輪番になった地区の方が担当する。

夕方、涼しくなり、演芸が始まる頃には、広い境内に30以上の夜店の明かりがつく。お札を納めに来る氏子も増え、足のふみ場もないほどの活気になる。私の子どもの頃は、北伊予村・岡田村・松前町と分かれており、私たちは他所者だった。恐ろしい人がいるぞ。気をつけろ」といううわさも流れ、暗いところはさけ、先輩に手をにぎられて、ビクビクしながら夜店をまわった。現在は、松前町補導センターの補導委員の方が要所・要所に立っておられ、町村合併で、同じ松前町という気持ちもあり、子どもたちは安心して、夏の夜を楽しんでいる。夜の9時過ぎまで、昔と変わらない賑わいが続いている。



「年中行事絵図」中村文雄 著「夏越」

(7) 夏祭り(夏祈禱)

中川原 加藤 招賞 (昭和10)

中川原地区では、毎年7月に夏祭り(夏祈禱)が催される。以前は7月13日に行われていたが、平成16年より7月の第二日曜日に行われるようになった。

この日は、午前9時頃より徳丸にある高忍日売神社の末社、中川原の素鷲神社に宮司さんをお迎えして神事を行う。この素鷲神社の主祭神は、建速須佐之男命で、配神は足那豆智命と手那豆智命が祀られている。境内神社には金刀比羅神社、奈良原神社があり、本殿は流造鉄板ぶきで、広さは3.2mである。いつの時代から行事が行われていたかは定かでないが、幕末頃から始まったのではないかと話である。

行事内容は、先ず祭壇に饅頭、米、御神酒、海水(塩水)を入れた小皿、南天の小枝(御祓い用)をお供えして、宮総代、地区役員が社殿に集まり祭礼が始まる。そしてこの半年間の穢れを祓い清め、田植え後の五穀豊稔、夏の虫除け、悪病除け、無病息災、家内安全等を祈禱し、宮司さんに続き地区代表者が玉串の奉奠を行う。その後、宮司さんの祈禱にまつわる伝承等、お話があり境内に集まった人たちも拝礼して祭礼は終わる。

昔は神社境内で婦人会が炊込み御飯のおにぎりを作り子どもたちにふるまっていたが、今は行われていない。その後、御神酒を各組の宿元へ持ち帰り、組中の者が頂きながら協議事項、伝達事項等の報告を行っている。



『年中行事絵図』中村文雄 著「夏祭り」

(8) お大師さん

出作 水口 憲三 (昭和12)

出作にあるお寺、真言宗豊山派の高照山吉祥寺は、地元の人々からは「お大師さん」と呼ばれて親しまれている。

昔、境内にあった大きな「なぎの木」に弘法大師さんが天下つてきたといわれ、そこにお寺が造られたそうである。

弘法大師像をご本尊としてお祀りしているが、戦前から大勢の参詣者があつた。人々はこの大師像を「目引き大師」と呼んで親しんでいた。「目引く」というのは「ほほえむ」とか「ウインクする」というような意味である。

「目引き大師」の由来について吉祥寺の住職松本宗教さん(昭和46)に聞いた。

「昔この寺のお小僧さんが毎朝のようにお茶をお供えてご本尊さんを拝んでいた。ふと気がつくとき、ご本尊さんがこちらを向いてちよつとほほえんでくれたように見えた。お小僧さんは毎日ていねいに拝み、ご本尊さんがほほえんでくれるのを楽しんでた。この話が広まって『目引き大師さん』とあがめられるようになった。」



吉祥寺本堂とお茶堂

あるとき、大師像が傷んできたので修理に出した。ところが、返ってきた仏像は、まったくほほえんでくれなくなっていた。不審に思つて修理をしたところに問いただすと、あまりにすばらしい仏像なもので、ついついすり換えてしまったとのことであつた。そして元の『目引き大師』像が返ってきた。またまたお大師さんはほほえんでくれるようになり、参詣者も大勢になったと言ひ伝えられている。」ということである。

お寺のようすを地元の西村経高さん(昭和3)に聞いた。

「戦前は近くの人ばかりでなく、伊予市双海町や久万高原町、さらに今治市大島からの参詣者も大勢いました。遠くからの参詣者は、お茶堂に泊まり、寺関係者がいろいろとお接待をしていたそう。また、このころには境内に舞台を作り演芸大会も催されていた。特に地元有志による田舎芝居には人気があつたようだ。」

目引き大師さんの名前からか、いつとはなしに目の病気が治るといわれるようになり、目の病気で困っている人のお参りが増えてきたそう。

出作のお大師さんは、弘法大師さんのお亡くなりになった21日をお大師祭りとして、大勢の参詣者を集めていた。弘法大師のお亡くなりになった21日の前夜はいまのお通夜にあ



雅児行列(昭和38年ころ)

たり宵大師とも言われてにぎわっていた。特に1月は初大師といつて親しまれ、さらに4月と8月のお大師祭りにもにぎやかであった。

昭和初期には特ににぎわっていたといわれている。このお大師さんの2日間は、境内には多くの出店が並び、大勢の参詣者でにぎわい、特に子どもたちは大喜びであった。その頃には、山門から南に向かって県道(松前・八倉線)まで、約200mにわたり、五色ののぼりが立ち並んでいた。

21年ごろのご本尊さまのご開帳の時には、かわいい子どもたちの稚児行列も行われて人気を集めている。男児も女児も色鮮やかな衣装を身に付けて、お寺から出発して地域内を回って帰っていました。このとき、行列の先頭を、鬼の面を付けた『だいは』が悪霊を払って歩いていた。子どもたちは『だいは』が怖くてたまらなかつた。この稚児行列は現在も引き続き行われている。

吉祥時では昭和の後期まで『胡瓜封じ』という行事も行われていた」ということだ。

『北伊予の伝承Ⅱ』掲載の西村博明氏の「吉祥時の胡瓜封じの行事」によると、この秘法は高野山の管長であった鎌田大僧正氏直伝の「胡瓜加持秘修法」で大正・昭和と加持祈祷が行われていた。最盛期には近隣の僧侶20名のご協力を願って実施したこともあった。

これは8月土用の丑の日に、信者は願い事を書いた紙を、穴を開けた胡瓜の中に押し入れ、豆でふたをして持参する。住職はこの胡瓜に秘法を施し、諸悪・諸病を封じ込めてその退散を祈願した。

その後この胡瓜を地中に埋めていた。この胡瓜が腐つてしま

うころには願い事がかなえられると考えられていた。そのため、早く腐るように雨水のよくあたるところに埋めるように配慮していた。信者は願い事がかなえられると、3年間は続けて祈願していたと言われている。

現在ではこの行事は行われていない。今では西条市楠にある梅檀寺(世田のお薬師さん)で盛大に行われている様子が毎年のように新聞やテレビで報道されている。



稚児行列(昭和38年ころ)

三 盆の行事



七夕

飾った七夕笹に野菜と生きた小魚を供える習わしがあった。笹は川に流すか畑に立てゝ虫よけの呪いとしていた。この日は七日正月に相当する行事が多く盆と関連してあり井戸替え墓掃除・七度の水浴びをする。晩には提灯を持ち集落内を巡っていた。

(9) 山郷寺東・西組の庚申さん

出 作 小松ヒトミ (昭和22)

現在、出作2・5番地に安置されている。『北伊予の伝承Ⅱ』掲載の西村博明氏の「山郷寺の庚申祭り」によると、「守護神は猿田彦命であり、地域の幸福や健康、豊作等を祈願したものである。最初は六軒で祭祀を行い、場所は現在の松山生協きたいよ店玄関あたりであったが、昭和30年代に二名神社高市宮司さんが二度目の遷移を行い、現在に至る」ということである。

爾来10月15日の地方祭にはそのころに新調した幟旗も掲げる。一昔くらい前までは、お参りに来て手を合わせている信心深い姿をよく見た。現在、祠の横には植木と草花が育てられている。

さて、現在は、山郷寺東組と山郷寺西組が合同で行っている。この二つの組はもと「山郷寺組」という一つの組であったが、昭和の時代、県道が新しくこの組の東に吉祥寺から南へ八丁坂に向かって抜けたあと世帯数が増え、40世帯を超えたため協議して東西に別れたものである。しかし、庚申祭は正月の御祈禱とともに、従前どおり各組から当番を出して、山郷寺組當時を受け継いで行っている。

・日時 毎年7月第一日曜日の午後。以前、農家が多い間は田植終了後の日曜日であったが、現在はその時期に近い前述の日と決めている。

・場所 出作公民館

・参加 各世帯1人。当番世帯は2人。

・内容 世帯数が少ない間は、供物をして皆で参拝していたが、現在は当番が代表して行う。その後、準備した料理で懇

親会をする。

・料理

現在は仕出しである。記録によると平成16年1月の御祈禱の場で提案、決議され、その年の7月から実施したものである。それまでは当番による手作りであった。メニューは、そうめん、きゅうりの酢物、冷奴、カレイのから揚げ、炊き込みご飯とゆかりご飯のおにぎりである。その年と前後の年の当番世帯が協力して調理・準備していた。

生業や家族構成、生活様式は変化したが、山郷寺東・西組は、「お庚申さん」として毎年50名近くが顔を合わせ、互いの無事を確認して懇親を深め、継承しているのである。



出作 山郷寺組の庚申さん

(1) 迎え火・餓鬼棚(精霊棚)

永田 渡部 朝明 (昭和13)

孟蘭盆会の行事である餓鬼棚(精霊棚)、迎え火について、永田の中村文雄さん(大正14)に聞いた。

「孟蘭盆会は、お釈迦様の弟子目蓮が、死んだ母親が逆さまに懸つて苦しんでいるのを救おうとしてお釈迦様に教えを乞うたところ、お釈迦様の『夏の修行期間のあける7月15日に僧侶を招いて、多くの供え物を捧げるとよい』との言葉に従つて供養したことが始まりといわれている。

以前、お盆は仏教行事として盆会が営まれていたが、現在は功德によつて先祖の地獄の苦しみを救うというよりは、この世の人間がみんな揃つて先祖の霊を招き、もてなし、親しく交流する行事になつてきた。それから、この日に供養すれば、あの世の父母はもちろん、生きている父母や親族も救われるとされた。

お盆には、各家の玄関には先祖の祭壇である餓鬼棚(精霊棚)が造られる。餓鬼棚は40cmあまりの正方形で周りに杉の小枝が立てられている。棚には団子やささげ(豆)、瓜、なす等の供え物を置き、餓鬼幢を吊している。

餓鬼棚を飾り、精霊を迎えるため8月13日には迎え火といつて棚の下でアサギを焚く。先祖はこの火をたよりに還つてくるとか、燃やした煙に乗つて帰つてくるとかいわれ、迎え火は早めに焚く。お盆が終わる8月15日には、先祖があゝの世に帰るとき迷わないように棚の下でアサギを焚く。この火は先祖が少しでも家に長く居られるように、できるだけ遅く焚くものとされている」と言う。

さらに、百八燈について聞いた。

「お盆の行事として百八燈会がある。百八燈会是新仏のある個人の家や地区で実施しているところもあるが、これは百八の燈火を灯して使者の靈魂を迎えたり送つたりすることである。

百八燈会では、昼間に板や棒とカワラケ(素焼きの皿)を百八個用意し、日暮れとともに、種油をカワラケに注いで燈芯をいれる。火は墓地のほうから順次燈芯につけていく。それは先祖の霊を導くためである。送り火の点火は逆で、外から墓地の方へ順次火をつける習わしになっている。

日暮れ前に家ではアサギを焚いて靈魂迎えをしてから家族が揃つて百八燈の明かりに照らされて墓地へ行き、先祖の霊と共にまた百八の燈火に導かれてそれぞれの家に帰るといふことである。

トボシアゲは残つた油や燈芯を大鍋に集めて強火で油が燃え盛るまで薪を燃し、いっきにみずを大鍋に注ぐと火の玉が立ち上がり、トボシアゲが済み、盆が終了したといわれる。トボシアゲは盆の物を総べて焼いて取り除くということである。」



「年中行事絵図」中村文雄 著
「餓鬼棚」

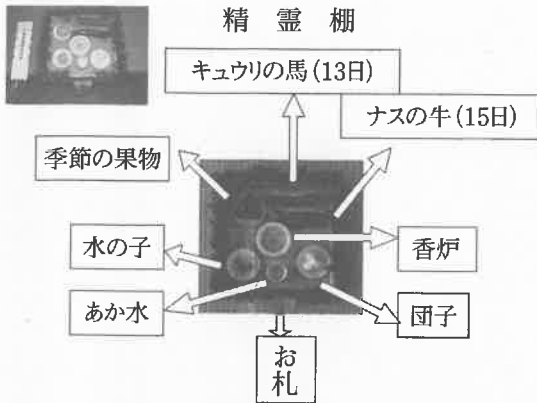
(2) 孟蘭盆会・盆棚・精霊棚

徳丸 渡部 喜代隆 (昭和14)

今でも徳丸で行われている盆行事、盆棚・精霊棚・お霊供膳などについて、本性寺の住職大黒俊二さん(昭和24)に聞いた。

8月は盆月ともいう。盆とは、梵語の「ウランバナ(孟蘭盆)」の略語で、「さかさに吊るされる」「苦しみ」という意味であり、漢字では「倒懸」と書く。

お釈迦様の弟子の目蓮さんが、餓鬼道に落ちていた母を救うため、お釈迦様の教えに従い、8月15日に長い修行の終わった僧たちを供養したという故事(仏説孟蘭盆經)からお盆の行事が始まった。



8月13日には墓前で迎え火をたく。店で買った麻木をもやす。先祖の霊が家に戻ってくると考えられ、門先(玄関の横等)に精霊棚をつくり、霊を迎える。僧は家々を廻ってお経をあげる。これを棚經という。

15日(16日のところもある)には門先(精霊棚の下)で送り火をたきます。迎え火は早めに、送り火は遅めにといわれ、キュウリの馬

で早く戻り、ナスの牛に乗って、ゆつくりとお墓へ帰って行くと考えられる。

新仏さんのある家では8月1日から出仏壇をまつり、盆灯籠をとます。24日には「とぼしあげ」をする。夕食のあと、百八のろうそくを門先から墓までとし、盆灯籠を焼く。そして出仏壇を片つける。こうして新盆は終わる。

○精霊棚の作り方

水の子Ⅱキュウリやナスを細切りして水に浮かべる。
あか水Ⅱ湯のみにきれいな水を入れる。

団子Ⅱ13日は迎え団子

15日は送り団子

牛や馬はご先祖様の乗り物で足は割り箸で作る。

○お霊供膳の作り方

お霊供膳とは、仏壇に供える小型の本膳のこと。肉類や魚類をさけた精進料理で、法事や命日のときにお供えする。お盆やお彼岸にもお供えする。



仏前

(3) 出作の盆踊り

出作 小松 ヒトミ (昭和22)

盆踊りの起源は浄土宗の念仏踊りだとも言われている。戦乱の続く京都を中心に人々は宗教に救いを求めてか、念仏踊りが広まったといわれている。先祖の霊をお祀りするお盆の行事とこの念仏踊りが合体して死者の霊を送るものになったようだ。一般には櫓を組み、その周囲を輪になつて踊る形態が多い。このような盆踊りは室町時代以降に普及したようだ。場所は、お盆の行事だけにお寺で行うことが多かった。

戦後、娯楽もほとんどないようなころ、北伊予でもあちこちで盛んに踊っていた。お盆の日や盂蘭盆の日に集中していた。北伊予小学校の運動場や各地のお寺で大掛かりな盆踊り大会が実施されていた。



集会所での練習(平成16年)

出作では8月20日の晩に吉祥寺でにぎやかに踊っていた。

21日は弘法大師さまのお亡くなりになった日で、この日をお大師さん(お大師祭り)としてお祀りしている。

20日は弘法大師さんがお亡くなりになった前夜祭で、今宵大師とも言われている。出作の盆踊りはこの宵大師(8月20日)に実施されていた。

盆踊りがにぎやかになり、吉祥寺の境内では狭すぎるために、今のJ R北伊予駅前の広場で実施されていたころもあった。

その後、娯楽が増えてきたせいもあつてか、出作の盆踊りもだんだんさびれて、いつしか消えてしまった。しかし、平成になつて、公民館活動の一環として公民館役員文化部の方々の肝いりで復活した。今では8月21日、お寺の境内で行われている。その日は本堂で施餓鬼供養が行われ、檀家の人々はほとんど出席する。

施餓鬼供養とは仏教語で、悪道に落ちて苦しんでいる亡者(餓鬼)に飲食物を施すという法会のことである。この施餓鬼供養の終了後に盆踊りを始めるため参加者は多い。しかし、見物者は多いが踊りに参加する人が少ないので、主催者側は頭を悩ませている。



やぐらを中心に盆踊り(平成16年)

(4) 中川原の盆踊り

中川原 本田 眞一 (昭和14)

中川原宗金寺住職水本俊雄さん(大正11)他に聞いた。

年に一度この世に精霊を迎えて、老若男女が集まっておどる盆踊り、中川原では、昭和55年ころから、盂蘭盆の8月24日に、宗金寺の御施餓鬼会の晩に行っていました。会場は、宗金寺の西の広場(現在の遊園地)や、裏の墓地の空き地でした。昭和59年からは、宗金寺の東の、コミュニティ広場になりました。始めた頃の櫓は丸太を組んで裸電球を吊るした粗末なものでした。踊る曲は専ら炭坑節でした、その後松前音頭、おいでや小唄、新伊予節等を踊るようになりました。広場に夜店の屋台が来てわた菓子や氷を売っていました。コミュニティ広場の櫓には舞台を作り、紅白の幕を張り、提灯を吊り、立派なものになり、年々新しい曲が加わって賑やかになりました。子どもたちの夜の買い食い楽しい思い出です。



- ① はじめたころの会場
- ② 墓地の空き地
- ③ 現在の会場(コミュニティ広場)
- ④ 練習会場(2階ホール)



消防団のいか焼き



愛護部の夜店



コミュニティ広場で



櫓をかこんで

(5) 大念仏

神 崎 鎌倉 啓典 (昭和12)

毎年8月12日に、神崎の禪正軒で行われる行事に「大念仏」がある。この「大念仏」について、神崎の池内初好さん(昭和10)に聞いた。

「現在は簡素化されましたが、私が子どもの頃は、出作、鶴吉、神崎から村役(区長・社寺総代等)の他、禪正軒檀家など、200人を越える人々が境内に集まり、盛大に行われたものです。

本堂で、晴光院の住職が読経して、平若左近の霊を供養した後、社寺総代を先頭に、村役など10数人が一列に並んで鉦と鉦(シンバルのようなもの)を打ちならし念仏を唱えながら境内の墓地を隅々まで歩いて、本堂の前に戻って来ます。

その後、参列者が西と東に別れて整列し、まず、お先導が大団扇を振り上げ、振り下ろしながら「大南無阿彌ロツパイ!」と唱え、東側に人々が手に持った団扇を振り上げ、振り下ろして「大南無阿彌ロツパイ!」と唱えます。それが終わると、続いて西側の人々が同じことをします。これを念仏が終わるまで続けます。この後、大人たちはお酒を酌み交わしながら、左近さんの霊を供養して終わります。」と言う。

この「大念仏」の由来について、次のような言い伝えがある。

昔、南北朝時代とも戦国時代とも言われており、定かではないが、戦いに敗れ、逃れて来た平若左近という武士が出作の音地やぶに差ししかかった時、追っ手に囲まれ、懸命に戦ったが、遂に討ち取られてしまった。そして、追っ手の者は、「主なき畜生め」と言つて、左近の乗っていた馬の首までも切り落としてし



大念仏風景(昭和53年)



まった。

土地の人々は、これを伝え聞いて「あゝ怖いこつちや、この武士は何処^{どこ}の人か分からんが、妻も子もあろうに、可哀想^{かわいそう}に」と言い合った。

ところが、それから程なくして不思議なことが起こり始めた。

毎晩、人が寝静まった頃になると、シャン、シャン、シャンという妙な鈴の音が聞こえるようになった。しとしとと雨が降る晩などは、ことに寂しく聞こえた。

土地の人々は寄ると、この話で持ちきりになった。

人々の中には、「そんな馬鹿なことがあるか、それは神経じや、耳の所為^{せい}じゃ」という人もおれば、「いや、わしも聞いた」「俺は戸の隙間^{すきま}から覗^{のぞ}いて見たら首のない馬が鈴を振って歩いていた。どうも神崎の禪正軒へ通うらしい、鶴吉の方でも、この鈴の音を聞いた者がいる」と言う者もいて、怖さは噂^{うわさ}を呼んだ。

そのため、土地の人々には、恐怖の毎日が続いた。

そこで、土地の人々が集まって相談した結果、供養に念仏を唱えることになった。

出作、神崎、鶴吉の三部落の人々が手に団扇を持って、7月12日の夜、禪正軒に集まって、お墓にお灯明^{とうめい}を供え、お先導が「大南無阿彌羅吽^{うん}パイ」と音頭をとると、人々がこれに合わせ、お念仏が始まる。念仏の一句切り毎に、人々は団扇を高く振り上げて拍子を合わせる。この念仏は、夜更けまで続けられ、その後、供養のお酒を頂いて解散した。

この念仏を始めてから、人々を恐怖に陥れていた不思議なことは、バツタリと止んだ、という。

なお、平若左近のものとと言われる五輪の塔が出作の二名神社の境内の入口右にある。



大念仏の行われる禅正軒(神崎)

今年の大念仏(平成19年8月)

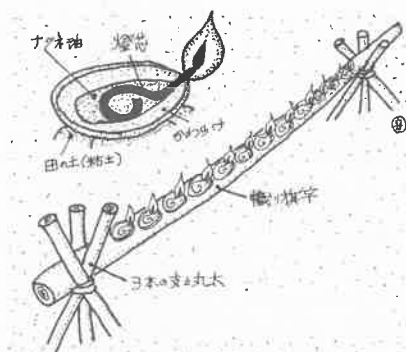


(6) 百八燈

東古泉 三好 安明 (昭和8)

早瀬辰郎さん(昭和3)、早瀬哲夫さん(昭和5)、松田清太郎さん(昭和6)に聞いた。

東古泉地区の百八燈は地区全体が参加する行事です。昭和20年代後半ごろまでは子ども会が中心でしたが、子ども会の大人の役員の方も大変です。まず素戔神社から祭りに使う幟旗竿を三本、神社横の水路に浮かべ共同墓地の近くまで流して運びます。水路から旗竿を共同墓地まで運び、竿の両端を、三本の丸太で足場をつくり、ささえます。この竿の上に田の土(粘土)を水を加えて軟らかくした、かわらけ(素焼きの皿)を等間隔で並べ固定します。皿は百八枚並べます。並べられたかわらけにナタネ油を入れ燈芯をおきます。燈芯が油を吸ったところ夕暮れが迫ります。燈芯にいつせいに点火します図①。油がなくならないよう加えて行きます。百八燈は夜おそくまでとまります。家族一同は墓地にあつまり先祖



図① 百八燈のともところ

の霊が天界にかえるのを思い出と共に送ります。夜も更けるころ百八燈のナタネ油は大鍋に集められます。これを急ごしらえのカマドにかけ、まきをどんどん加えて燃やしつづけます。子ども会役の大人はころあいをみはからつて、まわりの人々をカマドの大鍋から遠ざけ、長い柄杓で

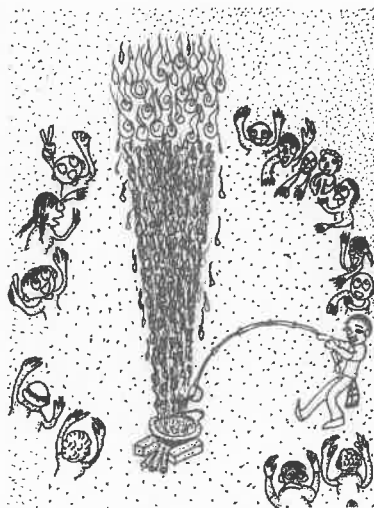


点火前、かわらけに油も入ってすっかり準備されています

して次の年にそなえます。平成19年の百八燈は8月14日、15日に共同墓地でおこなわれ、大人の愛護班の方2名、中学生3名、小学生4名でした。かわらけの油はサラダ油で燈芯はさらし布でした。写真は8月14日、15日に撮ったものです。かわらけは墓地のブロックべいの上に並べています。

の拍手と歓声が一気にあがります。この火柱にのって先祖の霊は天界へ舞い上がるのです。これで百八燈は終了します。

太平洋戦争前までは地区毎におこなわれていましたが戦争が激しくなり中止となりました。翌日かわらけは小学生の低学年の子どもが細かい砂やカマドの灰をつかって、黒くなったス



図② 亡魂火柱をつたって天界へのぼります。

水をくみ大鍋の中へ一気に水を注ぎます。すると火の玉が5~6mの高さに立ちのぼります。この火柱を亡魂といっています。まわりの人々

四

秋から冬の行事



亥の子(いのこ)
十月の亥の日を祝う行事
なせ亥の日を即日とした
かは不明 この月に亥の
子の神が田から家へ帰
ってくるともいわれ
またこの日から炬達を
入れる習俗がある
この晩は亥の子喧嘩
が付きものだ。た。

(1) お月見

徳丸 渡部 喜代隆 (昭和14)

昔から陰暦の8月15日の夜の月を中秋の名月といい一年中で一番月が美しく見える夜です。中秋の名月の夜が近づくと、指折りその日が来るのを楽しみに待ったものです。

物資や娯楽の少なかった時代のお月見の思い出について、徳丸の田中孝さん(昭和10)に聞いた。

「お月見の日が来ると、野原や重信川の土手で、すすきを取って来ました。そして、お米を中川原の粉屋へ持って行って粉にひいてもらいました。米の粉でだんごを作って、すすきを花瓶にいけ、ござやむしろを敷いて飯台の上に飾りました。そして一家そろって月見をしました。父が月にはうさぎが住んでいるもちつきをしているのか、かぐや姫が住んでいるのか、月にまつわる話をしてくれました。

枝豆や里芋、とうきび等もお供えし、これからのごちそうを食べるのがまた楽しみでした。そのことから、十五夜を芋名月、十三夜を豆名月とも言いました。」と言う。

私たちが小学生の頃は近隣の子どもたちが集まり、月あかりの中でかくれんぼや、おにごっこをして遊んだのを覚えていいます。

当時といえども子どもだけの夜遊びは禁止されていましたが、亥の子とか、お月見の夜は許されていました。年上の兄さんたちが子ども大将になり、きもだめしだと言って、お墓の石を持ってこいとか、だれだれさんの家の庭の松に登ってこいとか、柿の木の柿をもいでこいとか、色々なことを言いつけられ

て、庭や畑を荒らした事もありました。翌日叱られた事もありました。また、月あかりの中で、夜がふけるのも忘れて遅くまで遊び回った記憶もあります。

現在のようにテレビもない、娯楽の少ない時代であったので、月見という行事の中でせいっぱい風流を楽しみました。



名月 八月十五日の晩
を月見とも呼び団子を作り
里芋や芒の穂を供える
習わしがあるが単に月を賞
する為の風流の日ではなかつ
たはず、綱引きのことを十
五夜ともいう。
暦が普及する以前では望
の夜は正月十五日とともに
大切な折り目であった。

『年中行事絵図』 中村文雄 著「名月」

(2) 秋祭り

中川原 本田 眞一 (昭和14)

中川原の山本庫市さん(大正15)他に聞いた。

稲穂が実り頭を垂れるころ、夜になると獅子の太鼓の音がトコントンとコトンと聞こえてきます。御輿の手入れをして磨きます。10月12日になると素鷲神社と村内の5箇所に幟が立てられ、各組の御旅所には、提灯を立て、しめ縄が張られます。

13日と14日の夜には、子どもたちが宗金寺の観音堂に集まって、高張り提灯を持って家々を廻ります。土間で、繁昌せい 繁昌せい、と大声で唱えながら練ります。時には小さい子を胴上げて座敷へ下ろしたりして騒ぎ盛り上げました。道端の色づき始めた柿を見つけて取って食べたりしました。廻り終わったらお菓子を貰うのが楽しみでした。14日の宵祭りは、青年団が各組の御旅所を廻って獅子舞をします。演目は、さる、ぼーてん、かりゅうど、さんばそうの4曲です。新築の家にも廻り、最後に素鷲神社で奉納しました。昭和59年からは愛護部がするようになりしました。平成8年から子ども獅子舞を始めました。15日の朝、御神体を徳丸の高忍日売神社から「こうしんぐるま」で中川原の素鷲神社へ迎えます。神主により御神体を御輿へ移される神事が行われて宮出しとなります。その年の一の体の地域の厄年の男性が猿田彦になり御輿の先導役を務めます。区長宅から門廻りが始まり、鈴の音と、「もーてーこい もーてーこい」の掛け声と共に御輿が来ると、お米と塩水で御祓いして拝みます。

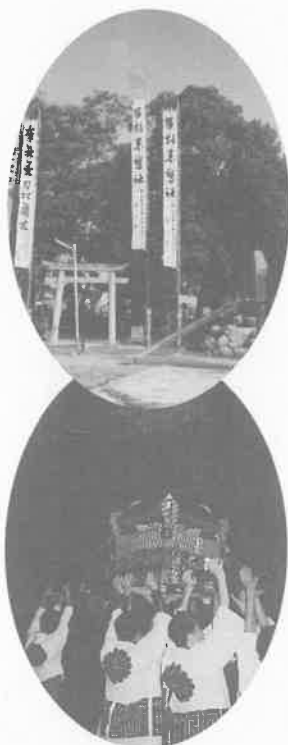
門廻りが終わると公民館で昼食と酒盛りになります。午後か

らは御輿にロープを巻いて、酔った勢いで大声を出して各組の御旅所廻りが始まります。御旅所に組内が集まり拝んで神主から御祓いを受けます。御輿について来た子どもたちはお菓子やみかんを貰います。新築の家へ行くと御馳走とお酒が振舞われて元氣を取り戻します。時には中川原橋へ行き、古川の神輿と鉢合わせをすることもあります。家々では親類縁者を招いて酒宴を開きました。

夜になると高張り提灯が先導して御輿をピカピカと輝かせます。酔った家族が加わって、練りが段々と激しくなり、頭取の制止を聞かず、御輿に乗り、差し上げ、かつえ、ぐるぐる回したりして盛り上がります。時々怪我人が出ました。御旅所廻りが終わると素鷲神社へ戻ってきて、残った力を出し尽くして練り続け最高潮になります。宮入りをさせまいとする家持と宮入りしようとする青年との揉み合いが繰り広げられた末、お互いに疲れ果てて宮入りとなります。太鼓の音がしじまに響き祭りが終わります。

昭和59年から青年団に代わり愛護班が中心になって運行するようになりました。

宮入り前の差上げ



素鷲神社 秋祭りの幟

(3) 獅子舞と仁輪加

横田 金子 忠行 (昭和7)

一年を通じて、色々な祭りがあるが、秋祭りが一番盛大な祭りである。神輿の渡御や獅子舞等の行事が多い。

横田の獅子舞は、古老の話によると、本村組と沖代組と二組の獅子があつて、お互いに競演していたとのことだ。いつの頃に合併して一つになったのか、古老の人も亡くなり、調べてみても年代は不詳である。

稲の穂が出て秋祭りが近くになると、あちこちで獅子太鼓が聞こえた。9月のたのめさんが済んだら、獅子太鼓を叩いてもかまんのじゃきん。」等と言つて、戦前には早くから練習していた。

獅子舞には、山探し、振り出し、上通り等の演目があつた。最後に、荒れる獅子をボーデンで叩き鎮めて連れ帰るのと、鉄砲で撃つて仕留めるのと、狩人の演技も二通りあつた。横田の獅子舞は前獅子、後獅子共に、左右の足に、白足袋と黒足袋を交互に履いていた。

獅子舞と共に、おやじい(親爺)がある。昔は何か正式な呼び名があつたと思うが、子どもたちからずっと、おやじい(親爺)と言つていた。百姓親爺が猿、狩人、狐をお供に連れて畑へ出掛ける。演技をしながら三周して畑に着くと、親爺と猿が残し、親爺が足をさすったり、叩いたりすると猿が同じ動作で真似をする。畑打ちや、種蒔き等が始まると、猿がすべてのことの邪魔をする。その度に親爺に石を投げられてころりと転ぶ。やつといういろいろな作業をして種蒔き終わると、猿を親爺が背負つて帰る。

子どもの頃に狩人をしたことがある。当時は納屋を借りて土間に藁を敷いて、獅子舞の練習をしていた。子役は狩人、猿、狐2人と4人が習っていた。鉄砲は本物の火縄銃を改造して軽くしていたが、演技はなかなかおぼえにくかった。「よう見よつて、おいさんのする通りにせいよ」等と言つて、丁寧に教えて貰つた。帰りには「あしたもこいよ」と言いながら、駄菓子をくれた。私たちの子役が最後で、戦争が始まり、獅子舞も中断した。

戦争が終わると、若い人たちが復員して来て、獅子舞が復活した。同時に戦前から獅子舞と一緒にやっていた「仁輪加」も始まつた。仁輪加には、一口仁輪加と仁輪加芝居があつた。一口仁輪加は獅子舞の獅子の眠るときに飛び入りでやっていた。仁輪加芝居は幕を引いて本格的であつた。10月の14日と15日の夜は、大きな旧家で獅子舞と仁輪加をやっていた。旧家の若い人間が舞台で居間から大勢の人が見物していた。「横田の若い人はよもだが多いので、仁輪加が面白いなあ」と期待されていた。仁輪加の終わりは、小咄や落語のようにおちがついていた。最後に必ず「仁輪加じゃ」と大声で言つていた。練習は囃中(囃)で、芸題を一般の人に知られないようにして、祭当日にあつた驚かすことであつた。

昭和の末期になって、若い人の減少や保存会の人たちの高齢化で一時中断したが、平成になって、せめて獅子舞だけでも伝承して行こうと、若い人の有志や愛好者の熱意で、横田の獅子舞は復活した。今は、小学生の好きな子も、太鼓や獅子舞を習っている。次々と後継者も現れて充実した獅子舞が伝承されるであらう。

(4) 安井「亥の子」今昔ものがたり

鶴 吉 相原 隆志 (昭和3)

プロローグ(平成19年)

心まちに待っていた11月1日(一番亥の子)の夜、幸い星のまたたく夜、門の外でガヤガヤと子どものさわぐ声が聞こえてくる。「来たな。」と外に出てみる。10人ほどの男の子だけ、大きい子、小さい子が屯している。近づいていくと、その中で一番背の高い子が「おいさん、亥の子搗かしていな」とぶっきらぼうに言う。待ちかまえていたことでもあり、即座に「おう、ええぞ」と答えるより早く、ぞろぞろと門の内へはいってきた。

さきほどの男の子が「搗くぞ」と言うので5、6人の子が亥の子をさげたまま、丸くなって位置をきめる。「ここ、一軒祝いましょう。祝いましょう。今夜(こいさ)の『亥の子』祝わんものは鬼産(もうけ)蛇(うけ)えんやらやと祝うてやる。」

歌に合わせて搗きはじめたのはよいが、短い綱で亥の子を持ち上げたり、落としたりする。何と亥の子の落ちるところは、子どもたちの足先の3cmもない近くである。「ちよつと待て、これは危ない。もつと自分の綱を長く持つて、みんな広がれ。」丸く大きく広がって搗きはじめた。

「二に俵ふまえて、二でにつこり笑うて、三で……その後はいらん。」それでも「亥の子」は引きつがれる。

昭和12年頃

大字鶴吉安井地区には子どもによって運営されている年中行事が三つある。(最近では隣接の賀佐地区と合同)

春の稻荷神社での子ども相撲、秋の「亥の子」、初午稻荷神社

の「おつや」(火祭り)、中でも一番よろこびの大きいのは亥の子であろう。これらの年中行事は大人が口をはさめない子どもの世界である。計画・運営会計まですべて高等科一・二年(現在の中学1・2年生)の男子が仕切っていく。

1、伝承される「亥の子」プログラム

○暦で亥の子を確認し、一番亥の子、二番亥の子を確かめる。

○宿の依頼と決定。今年男の子が生まれた家。該当なければ高二の家、または希望の家

○喜拾を集めてまわる。お亥の子さんのお金ください、とねだる。おこころまかせ。

○おかし、みかんを買いに行く。祭壇に供えた後で各戸へくばる。子どもに分ける。直会のしきたり

○当日、宿の主人といっしょに祭壇をつくる。

○亥の子を搗く準備、高張提灯2、手さげ提灯2

○宿の主人 しめなわ。力もちなど。

○子ども集合(男も女も)座敷へ上がって礼拝

○小さい子と女の子にミカンやおかしをくばる。

○宿の主人が「亥の子」を庭におろしてくれる。

○5年生以上の男子は自分の綱を胴環にとりつける。

○元氣よく宿を祝って道に出る。
各戸巡回に出発。



床の間の亥の子

2、先輩からの注意を確認し合いながらすすむ。

○集会所、お稲荷さんはていねいに搗く。

○四つ辻(十字路)には妖怪がでるから丁寧な搗く。

○橋の上は絶対搗かない。石橋は折れるぞ。

○他の組と絶対けんかしないこと。特に『亥の子』石のあてやいはしない。石が割れたら買えない。

○提灯係(4年生)火の用心をしゃんとせいよ。

○時々「力くらべ」をやれ。

高等科5、6人が、綱を短く持ち、亥の子石を空中に放り上げ、地面にたたきつける。大へん危険な術で小学生は後にさがって見ているだけ。

「ねんどりじゃあ」「かんどりじゃあ」と意味のわからない呪文を唱えながら続ける。かなり深い穴ができる。誰が一番はやくくたばるか、の遊びである。旧補習校前やお稲荷さんでやる。汗びつしよになる。



亥の子石



亥の子を搗く子どもたち

一戸一戸搗いて歩くと約2時間かかる。宿にかえると汗びつしよ。「腹がへった」と誰かがつぶやく。

小学生は全部帰した。これからが高等科のたのしみ。宿のサービスで夕食が用意されているのだ。「たきごめめしかな。」「かんづめめしぞよ。」しゃがれ声でつぶやきながら座敷に案内される。宿のおばさんにすすめられ、5杯もお代りをする。だんだん話し声も大きくなる。責任を果たした安堵の笑顔を見合って話はずきない。

彼等は大人へ一歩踏み出したのだ。

宿へのお礼も上手に言えて自宅に向かった。

翌朝、宿の屋根には昨夜のしめかざりが上げられる。亥の子は現在も続いている。

今回の執筆にあたって久津那安男さん(82歳)に大変ご協力、ご指導を頂きました。氏は『北伊予の伝承Ⅰ』昭和六十三年発行の際、執筆編集に携っており郷土研究のベテランであることを申し添えます。文中の写真も同氏に指導をうけたイメージ写真です。



屋根に上げられたしめかざり

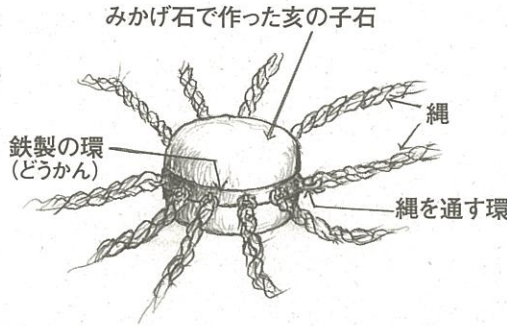
(5) 亥の子

神崎 野本 和伯 (昭和11)

亥の子は、旧暦10月の亥の日に行われる行事。近畿地方以西の各地に盛ん。関東、東北地方では全く見られない。亥の子について、神崎の水口義一さん(大正9)に聞いた。

10月中に、亥の日は、二度もしくは三度あり、1回目を一番亥の子、そして二番亥の子、三番亥の子と言っていた。各組内で宿となる家を決め、男の子が集まって亥の子石を祀り、祝いの膳を囲んだ。

亥の子石の環に、各自が持ち寄った荒縄を結びつける。一部の子どもは、高張りちようちにローソクを灯す。



その家の男子の一番下の子の名前をとり「〇〇さんを祝いましょ 祝わん者は鬼生め蛇生め」と亥の子歌をうたって祝って回った。(亥の子歌は『北伊予の伝承 I』、『松前町誌』を参照)

地区の境へ来れば、隣の組や地区に挑戦するような内容の歌をうたい、亥の子をつき氣勢をあげていた。「〇〇のホロケわら3本持つてこい ツべのはた焼いちやろ…」などとうたっていた。隣の組の連中も元気いっぱい、計ら

ずも双方が出会くと、両方から亥の子石を振り子のようにして鉢合わせの喧嘩をした。亥の子には鉄製で带状の環が巻いてあり、少々欠けたりはしたが割れることはなかった。亥の子の大きさは、組により違っていたが、かなり重かった。

亥の子は男子の出生を祝い、豊作に感謝し、各戸の弥栄を祈念し、寒い冬を乗り切ろうと元気づける行事ではなかったのだろうか。



亥の子をつく子どもたち(平成19年11月)

『北伊予の伝承 IX』企画・編集委員名簿

委 員 長	出 作	水口 憲三
副 委 員 長	神 崎	高石 勤
副 委 員 長	鶴 吉	相原 隆志
副 委 員 長	東 古 泉	三好 安明
副 委 員 長	出 作	小松ヒトミ
委 員	徳 丸	田中 孝
委 員	徳 丸	渡部 喜代隆
委 員	中 川 原	加藤 招賞
委 員	中 川 原	本田 眞一
委 員	神 崎	野本 和伯
委 員	神 崎	鎌倉 啓典
委 員	鶴 吉	済川 裕
委 員	鶴 吉	大政 邦和
委 員	鶴 吉	松田 雅子
委 員	横 田	金子 忠行
委 員	横 田	日野 勇
委 員	横 田	岩崎 利雄
委 員	永 田	二宮 静喜
委 員	永 田	渡部 朝明
委 員	永 田	藤野 玉男
委 員	東 古 泉	三好 健二
松前町東公民館長	筒 井	吉田 健勝
松前町東公民館主事	北 黒 田	武智 浩二

